

# 国語科 学習指導案

指導教諭

実習生

1. 日時 2019年6月6日(木) 第6校時(14時35分~15時25分)

2. 場所 3年3組教室(計37名 男...19名 女...18名)

3. 単元(題材)名、学年 『批評』の言葉をためる 第3学年

## 4. 単元(題材)の目標

- ・「批判」と「批評」の違いに着目して、筆者の「批評する言葉」についての考えを・捉えようとする。  
[関心・意欲・態度]
- ・筆者の考えを読み取り、自分のものの見方や考え方を深める。[読むこと]
- ・文章の中の語句を理解し、語彙を豊かにする。[知識・理解]

## 5. 教材観

本教材は、「批評」という一般的には高度な言語活動と思われているものを、平易な言葉と中学生にも身近な具体例によって、分かりやすく説明し、その意義を説いている。『批評』の言葉をためるは、学習指導要領の第3学年の「読むこと」、「エ.文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。」「オ.目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること。」に対応する教材である。本教材の読解を通して、批評的な思考がどのようなものなのか理解することで、今後の教材の読解にも生かしていくことができると考える。

## 6. 生徒観

本クラスの生徒は、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。ペアワークやグループワークへの抵抗感もなく、協力して課題に取り組むことができる。しかし、発問に対する挙手には偏りが見られ、一部の生徒の発言で授業が進行していくことがある。そのため、授業内ではペアワークやグループワークを取り入れ、全員が授業に参加しているという気持ちを持たせるようにしたい。

## 7. 指導観

全4時間の授業を行う。3時間で『批評の言葉をためる』を「批判」「批評」「言葉のキャッチボール」「自己ルール」などのキーワードを、生徒にまとめさせながら読解する。4時間目では、生徒たちが経験した修学旅行を基に「批評する言葉」をためる活動を行いたい。そして、この単元は周りの人間に対して批判的になる中学生に違いを受け入れ関係を築いていくことにつながる「批評すること」について考えさせたい。

## 8. 単元(題材)の評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
理由・根拠を明確にして物事を評価することが批評であり、そのために必要なのが「批評する言葉」であることを捉えている。	質問等をしながら自分の考えとの共通点や相違点を整理している。	筆者の主張・言葉を踏まえ、自分なりにまとめを書けている。	筆者の考えを読み取り、本文中の筆者の考えを踏まえて、自分のものの見方や考え方をしている。	本文中に出てくる語句の意味を理解している。

## 9. 単元の指導と評価の計画(全4時間)

### 指導と評価の計画

時	学習内容	指導上の留意点
第1時	<p>学習目標 『批判』と『批評』の違いについて考えてみよう。』</p> <p>・『批評』の言葉をためる」全文を通読。 ・本文を序論・本論・結論の意味段落にわける。 ・序論の読解。</p>	<p>・導入として、好みや意見の分かれる画像を見せ、「批判」と「批評」の経験をさせる。 ・「批判」と「批評」という言葉について考えさせる。</p>
第2時	<p>学習目標 『言葉のキャッチボール』『自己ルール』という言葉がどのような意味で使われているか、読み解こう。』</p> <p>・本論の読解。 ・「言葉のキャッチボール」「自己ルール」等のキーワードを基に中身を読み取る。</p>	<p>・「言葉のキャッチボール」の中で批評の言葉をためていることに気づかせる。 ・感受性と自己ルールの関係を確認させる。</p>
第3時	<p>学習目標 「自身の言語生活を『批評する言葉』の観点から振り返ってみよう。』</p> <p>・結論の読解。 ・「批評の言葉をためる」の筆者の考えを確認する。 ・全文を読んで、感じたこと、考えたことを書く。</p>	<p>・「批評する言葉」をためていくためにはどのようなことに気をつければよいか、筆者の主張について自分の考えをまとめさせる。</p>

第4時 (本時)	学習目標 『言葉』をためて、批評しよう。」	・修学旅行についての良い点などを発表し、グループワークを行う。
	・批評のことばの意味を理解し、批評の言葉をためる活動を行う。	

10. 本時の学習過程

(1) 本時の目標

第4時 めあて「言葉」をためて、批評をしよう。

- ・根拠を示し、他者と意見を交流することで自分の考えと比較する。
- ・根拠をもとに批評する言葉を使って発表する。

(2) 本時の評価規準

- ・あるものごとについて根拠を示し、自分の意見を書くことができる。【書く】
- ・自分の意見を「批評の言葉」としてまとめることができる。【話す・聞く】

(3) 本時の判断基準

十分満足できる	おおむね満足できる
理由・根拠が伴った意見を書いている。【書く】 自分の意見を他者と意見を交流し比較しようとしている【話す・聞く】	自分の意見を書いている。【書く】 自分の意見を提示し交流している【話す・聞く】

(4) 準備物

教科書、ノート、ホワイトボード、水性マーカー、付箋(黄)(青)、プリント

(5) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法)
導入 8分	・前時の学習内容の確認 ・学習目標の提示	・本時の学習が『批評』する言葉をためる」とつながっていることを意識させる。	
学習目標『言葉』をためて、批評しよう。」			
展開 6分	・修学旅行の良かった点をノートに書かせ、発表させる。	・1つ以上は書かせるようにする。 ・書き出せない生徒には、机間指導で個別に指導する。	・積極的に発言している。
5分	・修学旅行で「こうすればよい修学旅行になった。」という点をノートに書かせ、発表させる。	・良くなかったというような聞き方はせず、「こうだったらよかった点はありませんか?」のような問い方をする。	
4分	・修学旅行について、本校の過去の例、他の学校、高校、親の話など、知っている情報を発表させる。	・意見が出なければ、教師が情報を提示する。	
7分	・修学旅行の行先が A 東京都か B 奈良県ならと提示し、付箋を使って、A と B のいい点・あまり良くない点などを書かせる。(5分)	・A 東京と B 奈良県のいい点・良くない点を1つ以上は書かせる。 ・付箋は青：東京 黄：奈良として使う。	・理由、根拠を明確にして、ペアとの交流を行っている。
10分	・付箋を A と B のグループに分ける。 ・班で A と B についての批評する言葉それぞれホワイトボードに書かせる。	・よりよい批評を選ばせるようにする。	・グループ・ペアとの交流を積極的に行っている。
5分	・班毎に発表し、全体の中で意見を共有する。	・選んだ理由、根拠を明確にして、全体に発表させるようにする。 ・発表を聞いているときに、理由に注目して聞くようにさせる。	

まとめ  5分	・本時の振り返り 他の班の発表や、自分の班の他者との意見交流のなかで参考になったものや授業全体を通しての振り返りをプリントに記述する。	・プリントに記入の最中は机間指導で個に応じた支援を行う。	・授業全体をとしての振り返り自分なりのまとめを書こうとしている。
---------------	--	------------------------------	----------------------------------

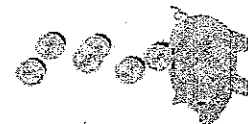
〈高評価〉

国語学習プリント

「批評」の言葉をたぬる 竹田青嗣

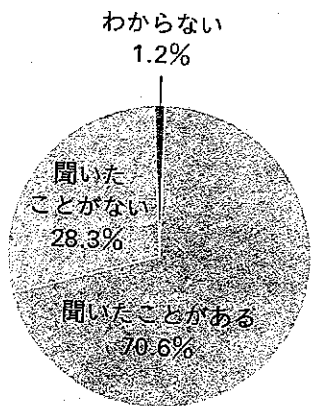
年 組 番 名 前 ( )

○「批評の言葉をたぬる」の文章を読んで感じたことや考えたことを書いてみましょう。(自分が使ってきた言葉や自分の「自己ルール」についてなど。)



### 「ぎっくり」とした説明」という表現について

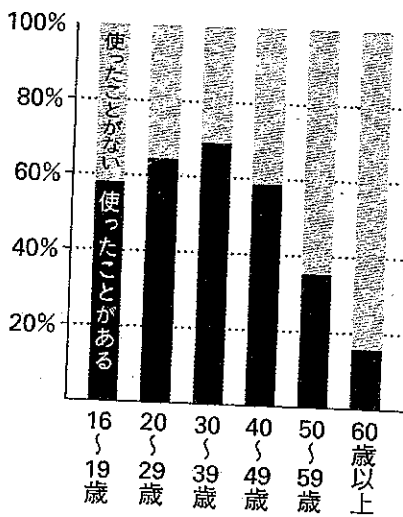
①聞いたことがあるか。



※小数点以下第2位を四捨五入している。

②使ったことがあるか。

①「聞いたことがある」と答えた人への質問



「平成24年度 国語に関する世論調査」(文化庁)より

結び付き、「白菜をぎっくりと切る。」のように、豪快に物を切るさまや、「ぎっくりと編まれたセーター」のように、粗く編んださまなどを表す際に用いられていた。

それが、最近では「ぎっくりとした説明」などのように使われることもある。調査によると、この表現を「聞いたことがある」と答えたのは全体の七割以上で、新しい表現が広がってきていることがわかる。しかし、六十歳以上では、「使ったことがある」と答えた人は二割以下と少なく、世代によって大きな差がある。

言葉は変化するものなので、新しい言葉遣いを間違いと決めつける必要はないが、それが相手によっては通じなかったり、わかりにくく感じたりする場合があることには、注意しなければならぬ。相手にわかりやすく正確に伝えるためには、ふさわしい言葉を選ぶことが大切だ。

① 世代間で意味や使い方が異なる言葉や、年配の人たち、また若い人たちだけが使っていると思われる言葉を探してみよう。

② 探した言葉について、その言葉を知らない人にもわかるように、二三百字程度で説明してみよう。

「パソコンがぎくぎく動く。」とは、パソコンが止まることなく、滑らかに作動する様子を表す表現である。「ぎくぎく」というと、クッキーの食感や、降り積もった雪の上を歩いていくときの音を連想するかもしれない。しかし、ここでは、物事がかどる様子を表している。他にも、「頼まれた作業をさくさくやる。」などのように使う。

## 「批評」の言葉をためる

たけだ せいじ  
竹田 青嗣

目標

●「批評する言葉」についての筆者の考えを読み取り、自分の考えを深める。

### 「批判」から「批評」へ

人は、成長するにつれてさまざまなことを理解していくが、若い人にとって大切なのは、自分を理解するということだ。そのためには、言葉を「ためる」ことが重要だと思う。

誰もが学校などで、少しずついろいろな言葉を覚えていくが、自分を理解するのに必要な言葉がたまっていくのは、十五歳ぐらいからだ。大事なものは、それが「批評する言葉」としてたまっていくところにある。

中学生ぐらいになると、まず家族や周りの人間に対して批判的になる傾向がみられる。相手の欠点が目について、たとえ口に出さなくても、心の中で批判の言葉を持ち始めるのだ。これはいわば、人間の心の「自由」の開始点だといえる。しかし、ここでの批判は、たいていまだ不平不満の言葉である。

「ねえ、〇〇っていうバンド知ってる？ あれ、最高。」

「そうそう、私も大好き、格好いいよね。」

「あの映画見た？ 私、全然だめ。退屈。」

「自己ルール」を確かめ合う

批評ができるようになると、友達どうしの関係も変わってくる。単に趣味の合う者どうしではなく、趣味の違いを受け入れ合えるような関係になるのだ。友達どうしで「批評」を交わし合うこと、それは単に互いに自分の考えを表現し合うということではない。互いに「自己ルール」を言葉によって交換し合うということである。「自己ルール」とは、その人がそれまで生きてきた中で身につけている「よい・悪い」の判断や、美意識の価値判断の根拠のことだ。大切なのは、いろいろなものを批評し合うことで、友達と自分の「自己ルール」を確かめ合い、認め合い、そして

15

10

5



3 成熟対  
18 真率類  
(75ページ)  
16 美意識類

「私も嫌い。いまいちだよね。」

中学生の間で耳にするこんな会話も、言葉が十分たまっていないために、好き嫌いの「批判」があるだけだ。「批評する言葉」にまでは成熟していない。しかし成長するにつれて、こうした感情的な「批判」は、少しずつ「批評」になっていく。

「私はこの歌が好き。歌詞がストリートで共感できるから。」

「そうね。ただ、メロディは少し単調じゃない?」

「そうかも。でも、その単調さで、かえって歌詞のよさが伝わるんじゃないかな。」

単なる好き嫌いの「批判」ではなく、ここには好きと嫌いの理由が入っている。好き嫌いの理由がきちんと言えるようになると、「批判」は「批評」に近づく。「批評」とは、自分の価値判断の根拠を明確にして、物事を評価することである。そのためには、自分の考えを的確に表現できるだけの言葉をためておく必要があるのだ。

10

5

### 「言葉のキャッチボール」の中で

では、「批評する言葉」をためるとは、どういうことだろうか。

例えば、ある音楽を聴いて心が動かされる。それを相手に伝えたいという気持ちが強くなればなるほど、私たちは、なんとかよい言葉を探そうと努力するだろう。しかしそのとき、相手は君の言い分に賛成せず、むしろ君の批評に反論するかもしれない。だが、それに対して君はまた反論することもできる。信頼できる人間と何かを批評し合うというのは、そういう言葉の真率なキャッチボールをすることだ。それぞれの感じ方をよく聴き取りながら、互いに主張したり、反論したり、納得したりすることである。

15

調整し合っていくということなのである。そこに、人間どうしのコミュニケーションの内実がある。

実は、こうした批評し合う関係によってしか、人は自分の「自己ルール」を理解することはできない。私たちは誰でも、自分なりの「自己ルール」を、いわば感受性のメガネとして掛けている。これは長い時間をかけて形成されたものだ。だから、自分の感受性のメガネがたとえゆがんでいたとしても、自分一人では決してわからない。自分のメガネの見え方が適切かどうか気づくのは、自分のものの見方と他人のものの見方とを比べて、その違いや偏りに気づくときだけである。

もちろん、全ての人が自分の「自己ルール」をもっているのだから、絶対に正しいものは存在しない。しかしそれでも、私たちは批評し合うことを通して、さまざまな他者の「自己ルール」と自分の「自己ルール」との違いを少しずつ理解する。そのことで初めて、自分の「自己ルール」のありようを自覚し、了解する。また、批評を重ねてゆくことで、私たちは互いの「自己ルール」を、常によりよい形に編み直していくことができるのだ。

### 言葉の力と感受性

批評し合うことの中には、自分の感受性を高めていくという側面も含まれている。人間の感受性は、よりよいもの、より深いものを味わいながら育っていく。しかし、言葉のキャッチボールを通して自分の中に「批評する言葉」をため、言葉の力を育てていく努力をおろそかにするならば、自分の感受性をさらに高めてゆく道を見失い、それを投げ捨ててしまうことになるだろう。

1 内実

17 おろそか

「批評する言葉」をためて、言葉の力を育てていくために必要なこと。それは当然のことだが、できるだけたくさんさんの優れた文章や小説に親しむこと。もう一つは、自分の考えをどう伝えるか以上に、人の言葉や言い方をよく聴き取るうとする気持ちをもつこと。この二つが大事な秘けつなのだ。

タケウマ・絵



筆者 竹田青嗣 一九四七（昭和二二） — 大阪府出身。哲学者・文芸評論家。  
著書 「哲学ってなんだ」「自分探しの哲学」など。  
出典 「中学生からの哲学『超』入門」を、本書のために書き改めたもの。



目標

● 「批評する言葉」についての筆者の考えを読み取り、自分の考えを深める。

### 1 確認しよう

「批判」「批評」「言葉のキャッチボール」「自己ルール」「感受性」という言葉が、この文章ではそれぞれどのような意味で使われているか、確かめよう。

### 2 読みを深めよう

「批評する言葉」をしっかりと「ためて」いくためには、どのようなことに気をつければよいだろうか。本文を参考にしながら自分たちの考えを出し合ってみよう。



「中学生からの哲学『超』入門」  
竹田青嗣

広がる読書